

69年目の朝後、その同じ月日をイワクニに生きて・・

集団的自衛権の行使容認に反対し、基地の機能強化に反対する日々。

2014年8月 田村順玄 (岩国市議・リムピース共同代表)

2014年8月1日、岩国基地に沖縄・普天間基地から移駐作業を続けていた「KC130空中給油機」部隊15機全ての移転が完了した。防衛省の事前説明では8月中を掛け移転作業を実施するとしていたものを、まる1カ月前倒して早々にその作業を完了したのだ。98年に日米政府で合意に至り、以来18年の時間を要した空中給油機移転劇がようやくここで完結した。

しかしその間に配備元の普天間基地では、ヘリコプターの墜落事故もあったし世界一危険な米軍基地の実態は変わらず続き、抜本的な解決策を見ることもなくあれだけ全県民が反対していた「県内移転」が一転「辺野古新基地」建設へと突き進んでしまった。

その辺野古新基地建設を推進する現知事の3選を後押しする、最も効果的な施策の一環が空中給油機の一日も早い岩国移転という事実作りである。おまけに、お盆すら関係なく岩国へは連日「オスプレイ」が飛んできた。普天間基地に24機配備されているオスプレイの沖縄での飛行訓練軽減が目的だが、全国への訓練移転が本土各地へ厚かましく開始され、北海道や静岡その度に厚木基地や横田基地へとオスプレイは岩国基地を経由し飛行を繰り返した。

こうした沖縄の動き、沖縄県民の普天間基地閉鎖の懶い逆行する辺野古新基地建設の行動がよくわかる。たとえ知事選挙で敗北があろうと、既成事実を積み上げ後戻りも出来ないような現実を作つておこうと地盤調査も強行し、その度に岩国基地が大きく絡みそのあと押しの役回りをするという現実が起こっている。

岩国基地は市民に50年来の「悲願」と言わしめた「沖合移設事業」完成でこれを悪用し、これが受け皿となって基地施設に次から次へと新たな機能が押しつけられていった。その典型的な一例が、厚木からの原子力空母艦載機59機の移転策である。4年間の先送りとなったものの、2017年には岩国基地へ厚木からの海軍航空機部隊の移転が着々進行している。2014年度の政府予算では何と、903億円という巨額の税金が岩国基地に投入され厚木艦載機部隊のインフラ施設建設が続いている。愛宕山への米軍住宅施設建設もその一環で、敷地造成工事の強行も続く。

国は岩国基地の新たな機能強化を企む度に、「アメとムチ」の汚い策略を並行させる。3年前にスタートした「岩国錦帯橋空港」の開港もそのひとつだが、21世紀の理想の住宅地建設を売り言葉にした「愛宕山新住宅市街地開発事業」も同様で、見事にその構想は裏切られた。基地の新滑走路建設に目星がつき埋め立て土砂の供給が終わった途端、その計画は取り止められた。そしてその開

発跡地に進められたのが米軍家族住宅である。

ここで又現れたのが新たな「アメ」で、米兵のためのスポーツ施設建設であった。多数の市民がこの施策に飛びつき、一方で米軍住宅建設の思惑を後押しする結果となった。私たちはこの愛宕山に米軍住宅を建てさせまいと、「愛宕山見守りの集い」を4年以上に渡って粘り強く継続している。

その思いに同感し、周辺の心ある市民が運動を継続させ新たに共同して闘う運動体が築かれつつある。組織の壁や団体の枠を乗り越え、多くの市民や団体がこの場所に集い、毎月1・11・21日には「見守りの集い」を継続する。空中給油機やオスプレイの配備問題など、大きな取り組みの呼びかけ・行動にも、この見守りに集う仲間が一つになってスタートし行動をはじめた。

1945年8月、終戦の年に生を受けた筆者は日本の戦後と全く同じ年。戦後のすべての有り様を同じ時間軸で見てきたし、いくらかでもその動きに係わってきた。自分が見て行動してきた68年間が、先の集団的自衛権行使容認の憲法解釈も偽り強行しようとする今の政府の動きに幾らかでもブレーキをかける行動が出来ないかジレンマが続く。

先頃、戦前の「写真週報」という戦争政策を宣伝する政府発行の雑誌を入手した。その内容を見て愕然とした。まさに今、安倍政権が日々国民に浴びせかけている戦前回帰の諸政策が、これでもかと当時の国民に押しつけている宣撫工作の真実がこの資料にある。

国民には戦時国債を奨励し、英語の使用を禁止し洋版のレコードを聞くなと強制する。贅沢をする国民には「そんな人はアメリカへ行け」となり、ただひたすらに戦争政策を強制する。

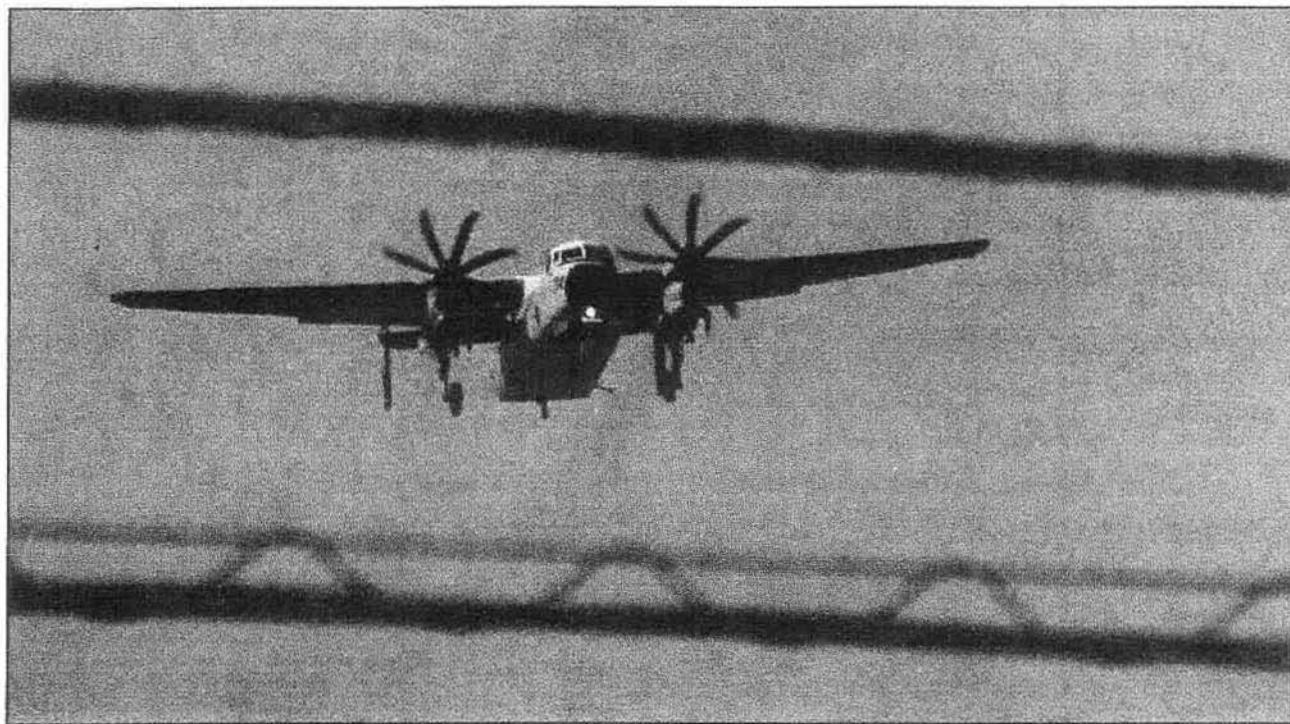
そんな忌まわしい戦前の資料をみながら、いまこうした戦前に似た戦争政策の発信地となっている岩国から、基地の拡大強化を阻止していくことこそが今に活かされている私たちの大切な任務だと実感する日々である。平和憲法を守ってゆくためにも、集団的自衛権の行使容認に反対し基地の機能強化に反対する行動を実践してゆきたいものだ。

(2018. 8. 27)



(2018. 8. 28)

空母輸送機C2後継にオスプレイ有力



ギアを降ろして厚木基地にアプローチするC-2Aグレイハウンド空母輸送機(2013.5.9撮影)

オスプレイをC2空母輸送機(COD)の後継にする動きが具体性を増してきた。

オスプレイを空母に載せてCODの運用試験を始めるという「エイビエーションウィーク」の記事が昨年4月21日付の琉球新報で紹介された。それから1年有余、米海軍はこの試験の結果を下院戦術空地軍小委員会に報告して、アセスメントの結果として下院軍事委員会に報告するお墨付きを得た。

空母輸送機C-2Aは、2機ずつ空母航空団に配備されている。厚木に展開する第5空母航空団(CVW-5)にも2機配備されていて、空母が洋上にいるときは陸上基地との間を往復して、輸送・連絡任務を果たしている。もしオスプレイがCOD機に採用されれば、C2-Aの退役する時期に厚木に常駐することになる。また、現在C-2Aが空母から飛来している嘉手納、岩国、三沢にも海軍のオスプレイが飛来することになる。

軍事委員会小委員会の報告書・オスプレイ該当部分

下院戦術空地軍小委員会は、海軍省がオスプレイを現在空母輸送機(COD)としての役割を果たしているC2-Aグレイハウンドの代替機として使用できるかどうかについてのアセスメントを行ったことを承知している。さらに小委員会はオスプレイのスピード、航続距離、垂直離着陸能力というユニークな組み合わせが空母輸送任務達成のあり方を変える可能性をもたらすことも理解している。よって、小委員会は海軍省が行ったオスプレイが空母輸送機の任務を果たせるかどうかのアセスメントに関して、2014年10月24日までに下院軍事委員会に説明するよう海軍長官に指示する。そのアセスメントの内容には以下の事項を含むものとする。C2-Aの代替機種(複数)の分析、C2-Aの代替機に要求される基本性能パラメータ、C2-A部隊の現状、C2-A代替機調達の現在のスケジュール。

(RIMPEACE編集部)